

していました。だから私は、人を助けたため、その恩恵の報いで、どうやら生きて帰り、今も元気で幸せに生きていると思っています。件せがれにもそう言い聞かせています。

私も戦後、人の世話をしたため苦しんだこともあったのですが、それでも生き抜き、安穏な生活をしています。これは、私の身代わり、犠牲になつて死んだ戦友、面倒を見た人が私や家族を守ってくれているのだと、毎日感謝しています。

## ルソン島戦記

愛媛県 渡部 美喜夫

昭和十六（一九四一）年十二月一日、陸軍兵器学校第三期生電工科入校、生徒隊第三中隊第三区隊（神奈川県相模市）に配属となった。教育期間三カ年であったが、戦況緊迫により二年四カ月に短縮され、昭和十九年三月二十日に卒業、直ちに

広島留守第五師団司令部付を命ぜられ師団通信隊に配属となる。

四月下旬、多摩陸軍技術研究所電波兵器練習部（東京小平）に派遣され、電波警戒機、電波標定機の研究生として六カ月の教育を受けた。

九月三十一日、原隊復帰、十月上旬、南方方面軍司令部付の命令があつた。

出発までに充分日時に余裕があつたので、父との面会の許可を得て故郷の父を呼んだ。広島駅で待ち合わせ、最後となるのではとの思いもあつたが、努めて平常心で一日広島の町を歩いた。父も同じ思いであることは充分察知できた。母は交通事情が混雑しているため同伴できるような体ではなかつた。

夕刻広島駅で切符を買い父に渡した。そして悄然とホームに向かう父の後姿を見送った。父は何回も振り向き手を振っていたが、その手には白いハンカチを握っていた。こうした光景は、当時全国津々浦々の駅頭や、港の棧橋で、毎日のよう

に見かける風景であったが、送る人、送られる人の思いは唯一つの願いに集約できたのではなからうか。

十一月二十四日、中隊の上司の方々の見送りを受けて、短期間ではあったが一生の思い出に残る連隊を後に単身征途についた。

門司港には続々と大部隊が集結し、数隻の輸送船に乗船中であつた。私の乗った船は一万トン級の客船「黄縁丸」であつた。客室は上下二段に区切られ、腰をかがめなければ歩けない状態であつた。各船とも甲板には孟宗竹の筏が満載されていた。

日はとつぷり暮れて乗船も終了したのか船内外とも次第に落ち着いて来た。いつの間にか船室の片隅に丸くなって眠っていた。エンジンの振動音で眼をさましたらもう翌日の明け方であつた。蒸し暑い船室を出て甲板に上がった。眼前に展開された光景に目を見張つた。洋上に白波を蹴る威風

堂々の輸送船団であつた。前後左右一定の距離を保つた見事な艦船の配列にしばらく時間を忘れて眺めていた。

駆逐艦、駆潜艇を含め十数隻の大船団は幾筋もの白い航跡を残して一路マニラへと南下する。九州の山々も北へ北へと遠ざかり、やがて水平線上に消えてゆく。いつの間にか船団の最後尾に改造空母が加わつた。絶えず艦載機を飛ばして船団の外郭を大きな円で囲むように敵潜水艦の哨戒に当たっている。

数日後、船団は台湾の高雄港に寄港、二日程停泊した。船上より見る市街には空爆の後が生々しく、港周辺の砂糖倉庫の焼跡には、表面が黒焦げとなつた砂糖が一面に泥沼のように流れていた。

昭和十九年十二月八日、大詔奉戴日の朝は、荒天のバシー海峡の白い牙をむく荒波がまつていた。甲板を洗い船腹に激突する波の音、ドドーと響く不気味な船の振動音、見え隠れする小艦艇、

やがて船内放送が始まった。宣戦の詔勅である。上下左右に揺れる船上では立つことはできなかつた。

船団は南下する。だんだん気温が上がる。昼間日陰になる場所を求めて甲板に上がる兵が多くなった。船団を組む見事な船舶の配列は乱れていなかった。しかし見え隠れする護衛艦の動きは変わってきた。行動範囲や速度に緊迫感が漲っているように感じた。

高雄港出航以来、夜は航海しなかつた。船団は島影に入り、その周辺を護衛艦が哨戒していた。

十二月下旬、最後といわれた大型船団は無事に宵闇迫るマニラ港に入港した。直ちに上陸開始、港内騒然、殺気立った号令が飛ぶ。私は単独行動ができる身軽さの反面、これから先の不安も否定できなかつた。

取敢えず港内の兵站司令部に駆け込んだ。混雑していた。手のすいた下士官に訳を話した。今晩は宿舎に泊まり明朝指示をうけるようにとのこ

と。翌朝マニラ湾の目を疑うような惨憺たる光景に啞然となる。我々が乗船していた船団は既に湾から去っていた。

目にとまるすべての艦船は、船首を大空に晒し直立している船、横転して船腹を海面にむき出し、波に洗われている船、船尾のスクリュウが海上に浮かび上がっている船、マストだけが海面に突き出している船等、この惨状はまさに船の墓場としか表現できない現場であつた。あゝこれが戦争なのか、三年間の夢も一瞬にして打ち砕かれた。

昨夜上陸したほとんどの部隊も、夜の内にそれぞれ任地に出発したのか混雑は少なかつた。意を新たに兵站司令部に入り、南方方面軍に転属命令を受けて、赴任して来た事を報告し、指示を待った。暫く待たされ、係官曰く「南方方面軍司令部は既に仏印のサイゴンに移動している。但しサイゴンに出る船の便はない。第四航空軍司令部に行

き指示を受ける方がよい」との返事があり、簡単な地図を書いて貰い市街に出た。街もまた空爆を受けて死の街であった。

不審な光景を目にした。いかにも敗残兵と思われるような日本軍兵士が竹槍のようなものを持ち道路脇に屯している一団があった。中には毛布等を身につけた兵士もいる。現地住民も物珍しそうに眺めている。爆沈の輸送船から助けられた兵士ではなかるうか等と想像した。

第四航空軍司令部に到着指示を待った。ここで第十航空情報連隊に配属の命令を受けた。連隊まで軍の車で送ってくれた。あゝこれでやっと最終目的地に落ち着けると思いながら今朝目に入ったマニラ湾の惨状等を尋ねた。多くは語らなかつたが、九月二十日の米軍の空爆によるものと話してくれた。連隊に到着、送ってくれた伍長に礼をのべ、お互いの無事を願って握手して別れた。

直属上官に着任の申告、第二中隊勤務を命ぜられた。続いて副官より細部の説明を受けた。

勤務先ポリナオ岬北端のポリナオ、出発は十二月三十一日、この日に連隊より第二中隊に原隊復帰する篠塚軍曹以下数人いる。同行するようにとの指示があった。

出発の三十一日の朝は暗い内に連隊の車でマニラ駅まで送ってもらい、軍用列車(貨車の屋根)に乗った。九月の米軍の空爆から免れた鉄道であろう。毎日定期的には運行してないらしい。既に制空権は完全に米軍の手中にあり、その間隙を縫って動いているものと思われる。マニラから目的地ポリナオまで直線距離で約二四〇〜二五〇キロある。軍曹の指示で途中下車した。ここからは徒歩以外に方法がない。

ポリナオまでの距離約八〇キロで中隊との連絡方法はなく、この近郊には駐屯部隊も警備隊もないという。篠塚軍曹も思案していた。しかし考えて見るとマニラを出発の際には中隊との連絡はとれていないのだろうか。連隊―中隊間の無線連絡は可能な筈だ。また連隊本部は、少数ではある

が原隊復帰する兵の移動をどう見ておったのか。今戦闘状態であればいざ知らず、唯命令一つで事後の処置まで考える必要はなかったのか、こうした疑問を強く抱いた。十一時頃であった。

軍曹は、二人が先発して中隊に連絡し、残りの兵は中隊の迎いの車が来るまでこの地点で待機する事を決めた。地理に詳しい軍曹と、私が先発することになった。私は兵隊から小銃と弾薬を借り受け出発した。六キロの行軍でも十二時間位かかる等話をしながら道を急いだ。後方からカルマタ（馬車、田舎唯一の交通機関）が追いついてきた。軍曹はその馬車を止め片言まじりで話しかけた。身振り手振りの交渉が始まった。前金の軍票を支払って乗り込んだ。

道路の両側は雑木林で、点在する集落の住民が物珍しそうに眺めている。手を振る子供もいる。驢馬の軽快な蹄の音がする長閑な風景であった。但し軍曹は絶えず周囲に目を配り、警戒を怠らない。私にも後方に注意するよう指示があり、ゲリ

ラは少数と見たらいつ襲撃するかも分からないと話しかける。私もだんだん恐怖感を抱くようになった。初めての経験である。

太陽が西に傾く頃、御者はこれ以上先に行くとは暗くなり家に帰れないので降りてくれと言った。金を出すからもつと行くように言っても承知しなかった。馬車を帰して再び歩き始める。日は落ちて夕闇は迫る、二人の軍靴の足音だけが耳についた。自然と速度は早くなる。軍曹は抜刀し、私は実弾を装填して安全装置を外し、銃を構えて急ぐ。ゲリラの危険度は夜に多いと聞く。また帰した馬車の御者が仲間を誘導する場合もある。

周囲は雑木林の山道、林の中の少しの物音にも息を呑む。銃を身構えた状態で歩き続けること数時間、出発してから何も口にしていなかったが空腹感はなかった。軍曹が突然「もう近いぞ」と明るい声だった。

数分後暗闇の向こうから「誰か！」と歩哨の鋭い声があった。軍靴の音で察知したのだろう「篠塚

軍曹だ」力強い返事であった。

昭和二十年一月一日の零時、二人は中隊に到着した。内地であれば除夜の鐘の最後の余韻が遠くに消えてゆく時刻であろう。中隊本部では中隊長以下、全員が起きて来た。

中隊長西尾中尉に曹長より、マニラ出発後の行動報告、中隊長厳しい表情で聞き終わり、その労苦をねぎらった。私もその場で着任の申告をした。心よく迎えてくれた。

中隊は直ちに待機している残留兵士の迎いの車を出した。車は電採用電源車で発電機は取り外してあった。曹長も道案内役として、数人の警備の兵と共に待機場所へ引き返した。午前中に残りの兵も中隊に無事原隊復帰し、元日は和やかな雰囲気であった。

当時中隊は電波警戒機一機を保有し、中隊本部後方二キロの高地に設置し、上空を通過する飛行機の飛行方向、高度を測定し、その情報を関係基

地に発信する任務についていた。その警戒距離は三〇〇キロ〜一五〇キロと記憶している。

一月二日の夜、中隊通信班が内地のラジオニュースで、海軍部発表「南支那海を北上中の敵機動艦隊を発見……」の放送を聞き、中隊長に報告した。中隊幹部に緊張感が漲った。敵機動艦隊はリングエン湾に迫り、リングエンより上陸するものと判断した。

一月三日の朝「敵艦船らしきもの発見」の声に屋外に飛び出した。眼前遙か水平線上に濃紺色の米粒を、隙間なく直線上に並べたような異様な光景に目を見張り、敵艦と判断するよりも好奇心が先に立った一瞬であった。

四日、五日、日を追ってじりじりと迫ってくる艦影は星粒大となり、やがてほんやりとその形が一隻一隻判別できる距離となる。不気味な圧迫感、極度の緊張感、そして南支那海洋上一面に展開された敵の大艦船群の全容を、リングエン湾に

突出したポリナオ岬の突端で確認できたのは一月六日の朝であった。

私は二日から本部―基地間を結ぶ仮設電話線の架線作業を始めていた。六日の朝も恐怖におそわれながらその作業に入っていた。

突然の大音響に我を忘れた。艦砲射撃が始まった。地をゆるがすような炸裂音はますます激しくなる。グラマン戦闘機が上空を舞う、湾の方向に黒煙が次々と上がる。

私は一挙に基地に駆け上がった。本部から電話があった。「電探を直ちに爆破せよ。基地要員は直ちに撤退準備せよ」と。ダイナマイトは中隊本部にある、私は山を駆けずり落ちた。本部に通じる道路に出て本部に向かって駆けだした。砲撃と空爆はリングエン一帯を襲う。

本部の方向から中隊長以下全員の姿が道路両側の雑木林の間に見えてきた。中隊長が手を振り「止まれ」の合図だ。私はその場で待った。中隊長は「もうよい、行くぞ」と、私も隊列に加

わった。

今からどんな事になるのか想像もつかなかった。敵の攻撃は間断なく続き、その黒煙はリングエン湾を覆い尽くす。敵の上陸間違いなしと判断した。中隊は一刻も早く上陸地点から遠ざかることが先決であり、山や林に入って敵機の追撃を避けながら南の方向に進路を取った。

漸く日は落ちて敵機は影をひそめたが、艦砲は相変わらずリングエン湾一帯に及んでいる。ここで中隊は基地に残した兵を待ため一旦街道に下って大休止に入った。電源車は夜になって出発したが、無灯のままの速度では歩くに等しかった。

夜半基地の車が到着し、四十数人の中隊員が揃った。夜の内に敵上陸地点との距離を延ばすため、人員の半数ずつを車で往復して後方に移動することになり、私は最初の車に乗った。途中一四、五キロの橋にさしかかり、渡り終わる頃、橋が崩壊、車は川に後部から転落、幸いにして重傷

者もなく行動に差し支えない程度の負傷で大惨事をまぬがれた。

一月七日、依然朝からリングエン方向の砲撃は続いている。敵機の来襲も昨日にまして激しくなる。日中は殆ど身動きができなかった。中隊幹部は苛立っているようである。何日か夜行軍が続いた。昼間も敵の追撃をくぐって南進することになった。通信班長の藤本軍曹より「タルラック」「クラーク」等の地名を聞く。リングエンから七〇キロぐらい南下しているらしい。しかしこれまで友軍と一度も出会ったことがない。情報も入手しているようではない。全く非武装の孤立部隊である。中隊幹部は何箇所かの道路標識を確認しながら南下が続いている。

藤本軍曹が「マニラに向かっているようだ」とつぶやく。成程マニラには連隊本部がある、当然合流するものと思った。その日の夕刻北上する友軍のトラック数台と出会った。中隊幹部はマニラ

周辺の情報を手に入れた。北上するか南下するか、中隊長の決断を待つ。ひと時だった、中隊は北に向かった。パレテ峠を越えて北部ルソンに進行することを知らされた。

食糧も乏しくなる。早朝、点在する集落で調達しながら飢えと戦う（略奪に近い行為であったかもしれない）。カバナツアン、サンホセへと北上は続く。サンホセからパレテ峠に向かう坂道では、十日以上も続いた逃避行に誰もが疲れ切っていた。

一月下旬、遂にパレテ峠を越した。リングエンに上陸した米軍はパレテに進行しているとの情報もあった。このパレテ峠は北部に入る最後の砦として鉄兵団が陣地を構築していると聞いた。

二月の初め中隊はバンバンに入った。この周辺はまだ日本軍の勢力圏内とあって、各種の部隊が混乱する中で、友軍を求めて各地から集まった小部隊が集結しているようであった。



我が中隊もバンバンに止まり軍の指示を待つことになったのか、集落の住民が放棄した空き家等に落ち着いた。この頃は敵機の来襲も少なく、食糧確保に追われた。中隊幹部は情報の収集と情勢の分析を主としていたようであった。

私も近隣に駐屯する部隊との連絡に、度々借り出された。本部で一番若く元気であったからだろう。用件は簡単である。書類の授受だけである。しかし行動は日が暮れてからであり、また殆どがマガト川の対岸に註屯部隊で、川幅五〇メートル渡らねばならない。腰までつかる深みに入れば流される。ゲリラの心配は殆どなかったが、出発する時は必ず本部付の柏木曹長が自分の拳銃を持って行けと渡してくれた。そしてどんなに遅くなくてもイモか何かの食べ物を用意して待っていてくれた。その頃、通信班長の藤本軍曹がマラリアで発病、毎日高熱が続く身は衰弱する自分の用ができかねる状態となった。

三月二十日、このような情勢の中で、私も軍曹に昇進した旨、柏木曹長より伝えられた。おめでとうの一言が嬉しかった。卒業してから一年経ったのだと複雑な気持ちであった。

二、三日過ぎて新しい任務を与えられた。戦闘司令所の通信班としてバンバンに残り、司令所の指示を待つよう中隊長から言い渡された。バンバン戦闘司令所とはパレテ峠、サラクサク峠の第一戦闘部隊の指揮所である。

その日の夕刻、中隊は、我々通信班一個分隊を残し、中隊長以下全員バンバンを後にした。全員の武運を祈り静かに見送った。柏木曹長は屈託のない笑顔で振り返り、高く手を振った。

私は通信班長藤本軍曹のことが気になった。熱はないが今の衰弱した体では、とても我々と行動を共にすることはできない。幸い対岸には野戦病院がある。病院とて名ばかりで雨をしのぐだけの仮小屋であるが、班長に入院を勧めたが返事がなかった。戦闘司令所に配属となり山に入る事を話

した。班長も納得してくれた。

翌日、司令部を訪ね、指示を受けることにした。二キロ離れた山腹にあり、谷川から一〇〇メートル程登った所にある。指示を待った。無線機は登り口手前に二つある横穴の一つに準備されている。開設は「明日準備でき次第」とのことであった。急いで班に帰り、兵と相談して今日中に藤本班長を入院させることにした。若い元気な四人の兵を選んだ。川を渡らなければならないので背負う以外にない。私と五人で夕方までに着くように仮小屋を出た。

野戦病院側に事情を話した。快く引き受けてくれた。軍曹は別れの時一人一人の手を握り、うなずきながら涙を流していた。

翌日早朝、司令部の近くの横穴に移った。空中線の準備、通信機の調整、司令所との連絡、準備は整った。無線機は師団通信用「三号甲」、通信距離八〇キロ、電源手回し発電機。

こうして我が通信班は、パレテ、サラクサクク

の第一線戦闘司令所と内地、台湾、南方方面の無線の中継基地として、昼夜の別なく、薄暗い横穴を住居に、電鍵を打ち続け、発電機を廻し続けて、その任務を終えた。それは鉄兵団、撃兵団の将兵が守り続けてきたパレテ峠、サラクサクク峠が敵の手に渡るまでの任務にしか過ぎなかった。果して戦争遂行の任務とは、何を意味するのだろうか。

五月に入ると、敵の空爆は北に伸びてきた。遙か南のパレテ峠方向の炸裂音も激しくなる。地を揺るがすような地鳴りが続く、黒煙が上がる。日増しに激変するパレテ方面、やがてバンバン付近の空爆も本格化してきた。街道も集落も森も林も連日の無差別攻撃に原容が変わる。こうした状況の中で糧秣も底をつく。空爆の隙を見て、通信要員を残して、原住民の隠匿物資を捜さなければならない。

五月中旬より、バンバン付近の駐留の部隊も動

き出した。パレテ方面より北上する部隊もある等、不穏な情報が耳に入るようになった。司令部の反対側の山腹に憲兵分駐所があったが、いつの間にか、その人影は消えていた。司令部からは電報以外何の指示連絡もない。敵の空爆の目標地点もバンバンからバヨンボン方向へと移っている。何か戦況の様相に変化が生じてきたように感じ出した。

五月下旬、戦闘司令部が闇に乗じて一夜の内に全員山を下りた。我々はまたここで、組織から切り離され完全に孤立した。

三月、中隊長の命令は、指令所の指示に従えであった。しかし指令所からの最後の指示は貰えなかった。もう取るべき道は唯一つ、一刻も早くここを脱出し対岸に渡ることだ。頼れる部隊はない。一人が用を足すにも全員が待つこと等申し合わせて、直ちに行動に移った。取りあえず暗号表を一枚一枚焼却、任務を終えた無線機を叩き壊し、横穴壕の奥に埋めた。空中線を取り外すのに

手間取ったが、何とか間に合い、あとは装具と糧秣だけだ。充分ではないが、何日分かの米はある。

明けきらぬ内に、川を渡らなければならない。増水していて手間取ったが、予定通り事は進んだ。街道で北上中の小部隊に出会った。指揮官の将校に、行先を尋ねた。話そうとしなかったのが簡単に経緯を話した。気の毒に思ったのか「我々はキアンガンから山に入る。充分な事は私には分からない。パレテはもう時間の問題だ、急ぐ事だ」との貴重な情報と指導を受けて嬉しかった。

将校が手を差し伸べてくれた。固い握手に私は目頭が熱くなった。厚く礼を述べ、武運を祈り見送った。

もう迷わなかった。北上する部隊の後を追えばよい、何とかなる。次第に登り坂となる。バヨンボン、ソラノ、バガバックと聞き覚えのある地名に、北進していることは確信できた。

六月上旬、後続部隊からの情報では、敵はバン

バンまで進出し、バヨンポンを砲撃しているとのこと。背後から迫る敵戦車、日常行事となった空からの攻撃、途中で河川の氾濫で濁流になやまされ、橋を爆破された渡河点で工兵隊の筏いかだで渡り、友軍の地雷布設に追い立てられながら、我が分隊八人もキアンガンに辿り着き、他の部隊に混じり、そのまま山岳地帯に入った。しかし今からどうなるのかどこまで行くのか先の事は分からなかったが、他の部隊の後を追い深山に入った。情報によればこの深山は方面軍司令部の最後の転進地である事は、間違いないようであった。

この山岳地には原住民のイゴロット族が住んでいて、原野を焼き払い、その後にはサツマ芋を植え付け、また開いた柵田はちょうど稲の収穫期を終えた頃であったが残っている所もあった。また穂についたままの籾を住居の周辺に隠してある。イゴロット族は、日本軍が入ったため、そのままにして戦禍を避けて山中に逃げ込んだのだ。日本軍はこうした食糧を喰い尽くして生きてきた。

七月の半ば頃からは、それもなくなり、焼け跡に生える野草（日本の「春菊」に似ているので春菊と名付けた）が常食となった。長期間蓄積していた疲労と極端な栄養失調、その上マラリアにやられた日本軍の死体は、山道に谷川に無数に転がって腐臭を放っている。現実とは思えない惨状である。しかし誰もその死体から何ら特別の刺激も感じなかった。死体は特別に編成された道路清掃隊が片付けても、後をたたなかつた。

そんな時、我が班の通信兵の山内兵長が発熱した。目は潤み顔面蒼白となって口で息をする状態となった。部隊から見放された我々八人は、彼とは何をするにも行動を共にしてきた。特にパンバンの無線中継所では、彼が中心となって電鍵を打ち続けてきた。「死なせてはいかん」それは私だけでなく班員皆の気持ちであった。

山道より一段下がった平坦地に彼を寝かせた。水筒の水を口にあてがったが、含もうとはしなかつた。後続部隊は頭の上を通過する。敵の追撃

は今の時点では考えられない。しかし空爆は今尚続いているが、広範囲の山岳地帯では充分的を絞ることができないため、至近弾も受けることはなかった。

私は通過部隊を待ち受けて、マラリアの薬キネを分けて貰いたいと懇願した。どの部隊からも相手にされなかった。

何とかして、口から食べさせてやりたかった。夕暮れを待つて班の全員が乏しい米であるが、一つまみずつ出し合い、粥を炊く事にした。一握りの米が集まった。一合ぐらいの水粥ができた。木の枝を折ってスプーンを作り、体を少し起こして水粥を少し口に入れてやった。皆が見守った。祈るような思いであった。しかし、自力では喉を越すことはできなかった。

何秒かたった。一人の兵が背中をさすってやった。ゴクンと喉を鳴らした「食ったぞ」誰かが言った。皆が一樣に大きな溜息をついた。また一匙、また一匙、時間をかけて三分の一ぐらい喉を

通った。山内兵長が少し首を振った、気がついたようだ。そのまま寝かせた、夏とは言えルソンの山も夜は冷える。

誰かが付近に置き去りにしてある通過部隊の荷物の中から携帯用天幕を見付けて来て、寝ている山内兵長にそつと掛けてやった。

明日の朝まで大丈夫だろうか、小声で話し合った。私も気になる事が一つあった。もしもの事があつた場合、運良く私が生きて帰ったら、家族に對し詳細を知らせねばならない。彼の戦歴を知らせてあげたい。しかし私の知る範囲では、

「出身地・青森県、年齢三十二、三歳、応召前の職業は通信講習所卒業後郵便局勤務」  
ぐらいで、はっきりした住所を捜すことができるだろうか。今の状態で聞く事はできない。こんなことを思いながら一夜を明かした。

翌日兵長の寝息は静かであった。顔にも生気があつた。額に手を当てると熱も幾分下がっている。皆我が事のように喜んだ。その朝は昨夜の粥

を温めた。昨夜と違い口に入れると自力で喉をこすようになった。もう大丈夫、しかし未だこの山坂を歩くことはできない。今日一日、この場に居座る事に腹を決めた。通過部隊の若い将校から「何をしているのだ」と声がかかる。「病人です」今度はこちらが相手にしなかった。逃亡兵ぐらゐに思ったのかも知れない。戦場には往々にしてあることだ。

その夜も一つまみの米を出し合った。もう自分でスプーンを使うようになった。量も増えた。翌日、今日は歩くと言い出した。無理とは分かっていたが、いつまでもここに止まる事は許されな

い。装具は交替で持ち合った。後続部隊が追い越して行く。ゆっくり歩いた、無理はしなかった。二日程歩いて、目的地と思う地点に到着した。軍司令部の近くではなかるうか。

先行部隊が目立たないように谷や森に分散しているようだ。また任務を帯びて出発した部隊の空

小屋もある。狭かったが八人が一つの小屋に入り、一応ここに落ち着いた。

兵長も追い追い元気を取り戻し、順調に回復しているようで安心した。改めて涙を流し繰り返して見返り礼を言った。バンバン出発以来二カ月ぶりに見る皆の笑顔であった。一握りの米と友情に神の御加護を戴いた。正に奇跡としか思えなかつた。

また幸いしたのは、通常の部隊であればこうした行動はとれなかつたと思う。分隊単独で自由な行動ができたからだろう。

夕暮れまでに時間があるので、上部機関と連絡を取るため一人で小屋を出た。連絡箇所はすぐに判った。「官氏名、兵員数、各兵の兵科、年令、入山前の勤務」等を簡単に聞かれ、明日全員で来るよう指示があった。気になっている山田兵長のマリアの件を付け加えた。不機嫌そうな顔をした。いよいよ明日は部隊の再編制がある。各人の配属部隊が決まると思う。皆バラバラになるので

はなかるうか等、深夜まで話は尽きなかった。

翌日、連絡所の指示は予期した通り八人それぞれ別の隊に配属された。林隊は私一人であった。名残はつきなかつたが再会を誓い、握手し肩をたたいて、迎えの兵と共にそれぞれの小屋に向かった。山内兵長は涙を流しながら皆に深々と頭を下げた。

林隊は設営隊で、現在の任務は司令部の壕掘りと宿舎の建設であり、一山越えた場所の木を切り建設現場まで運搬することと教えてくれた。翌日から作業に出た。

マラリア栄養失調等で極度に衰弱した兵士にはあまりも過酷な労働であったが、各隊に割り当てられたノルマの達成は、至上命令であろう。遠くで砲撃音は未だ続いている。第一線で死闘を続けている将兵もいるだろう。

運搬作業が終わる頃、敵機は毎日降伏勧告のビラを撒き続けた。「この勧告状を持って何々道路

を下れば米軍は君達の衣食住を保証する」という内容であり、三色刷りで富士山と桜を背景に老人、女子、子供の待ちわびる顔や、山下將軍とマッカーサーの将棋の対局面面でマッカーサーが將軍に王手飛車取りの凶柄等で、將兵の郷愁をそそり日本兵の戦意の喪失を煽るような宣伝ビラであった。

やがて広島、長崎の原爆を知り、八月十五日の終戦の日を迎えた。毎朝必ず上空に飛来する敵機も見えず、砲撃音も聞こえず、どこからともなく戦争集結のニュースが流れてた。將兵の「ホッ」とした顔がほころびた。日本が負けたことを嘆く余裕もない程疲れ果てていた。どんな形でもよい、早く終わることを誰もが切望していたのではなかるうか。しかしまだまだ飢餓と、マラリアとの戦いは続いている。

掘り荒らされたイモ畑の残りものを捜す。原住民の隠匿物資の稲穂を捜す、野草の春菊を摘む、

簡単に手に入るものではないが、個人個人が解決しなければ生きてゆけない問題である。また司令部の物資運搬の使役も苦しかった。往復二泊三日の予定で山を下るまた登るである。塩の受領も道路清掃作業も同じような行程で多くの兵士が狩り出された。三八度ぐらいの発熱では病人ではなかった。

キアングンで武装解除を受けたのは九月下旬頃であったように思う。そこには帝国軍人の姿は無かった。疲労極限に達した敗残兵の痛々しい姿であった。服はボロボロ、裸足の兵も多かった。

丹念に手入れしてきた小銃も「菊の御紋」をすり削り、日本軍が集めて米兵の指示でぬかるみの道路に敷いてゆく。原住民の女、子供までが、部隊の中に割り込み、兵士のポケットに我れ先にと手をつた込み、目星い物をひたたく。何の抵抗もできない兵士の姿。それをニヤニヤ笑いながら眺めるアメリカ兵、この恥辱は生涯忘れることはできないであろう。

二日程キアングン仮收容所で暮した。初めて米軍の携帯用糧秣を味わった。総てに大きな差がある事をここでも痛感させられた。そして米軍の輸送用トラックで次の收容所に出発した。

数カ月前の敗走中の惨状を思い出す。

キアングン目指して急ぐ在留邦人の婦女子。傷病兵の痛ましい姿。目を覆いたくなる光景が脳裏に焼き付いて離れない。

バンバンを通過する時、野戦病院に入った藤本軍曹の涙を流してうなずいた、あの顔。

無事終戦を迎えたであろうか。

やがてパレテ峠に差し掛かる。山裾を削って掘げた道路は見違えるように広くなっている。数カ月前までこの山中で死闘を続けてこられた鉄兵団、祖国の家族のもとに帰れぬ将兵の御霊の御冥福を心から念じ、深々と頭を下げて、再び訪れることはないパレテ峠を後にした。

やがてカランバン收容所に入る。渡された作業



着の上着の上衣にもズボンにも黄色いペンキで大きく「POW」と書いてあった。

祖国日本に帰る人、帰れぬ人果してこの戦争は何であったのだろうか。負けることが分かかっていて、なぜ戦争をしたのだろうか。

最後に記憶に残る懐かしい人々のお名前も記録に残しておきたい。

第四航空軍第十情報連隊第二中隊長 西尾中尉

本部分 柏木曹長 篠塚軍曹

通信班長 藤本軍曹

通信手 山内兵長 金子上等兵 石井上等兵

兵

暗号手 上原兵長 宿並上等兵 香取上等兵

兵 杉本上等兵